

出席するのに課題を出さない大学生たち

田上 正範

Why don't students turn in their assignments even though they are in attendance?

Masanori TAGAMI

【キーワード】 成績評価、出席率、提出率、若者論、アルバイト、社会的信頼

要旨

もはや死語になったアフターコロナであるが、大学の教育現場に携わる教員の一人として、大学生に違和感を抱く。授業には基本出席し、最後の授業回まで出席するのに、単位を落とす大学生（不合格者）が増えているからである。授業の受講態度には問題はない。思い違いか何かの予兆か。そこで、担当した科目において、2022年から2025年までの成績分布を調べ、特に不合格者の欠席率と課題提出率を集計してみた。その結果、従来と同様に、授業の欠席が多く、かつ課題の提出率も低い不合格者（傾向 a）の他に、従来と異なり、授業には出席するが、課題の提出率が低い不合格者（傾向 b）、及び、授業に出席し課題も提出するが低得点が続く不合格者（傾向 c）、授業は欠席しても課題を提出するが低得点が続く不合格者（傾向 d）を確認した。コロナ前から予兆のあった、予習・復習の時間に影響を与えるアルバイトの増加が学習の妨げになっていることを示唆する。

1. 背景

1.1 大学生のまじめ化

大学の授業への出席はどのような意味をもつのだろうか？

片桐（2014）によると、バブル経済の時代を頂点に1980年代から1990年代初めにかけて、大学は「レジャーランド」と揶揄されたが、2000年代以降になると「就職予備校」へと変貌し、大部分の大学生にとって授業はまじめに出席するのが当たり前になったという。その背景として、1990年代のバブル経済崩壊以降、日本経済はどん底状態にあり、大学生の就職に関しては「就職氷河期」と呼ばれ、大学生たちはまじめに授業に出て単位を取っていなければ就職もままならないという不安感に囚われたことを理由に挙げる。また、国立教育政策研究所（2016）が実施した「大学生の学習実態に関する調査研究」によると、全国の国公立・私立大学と短期大学に在籍する大学生2万件からの調査結果から、授業への出席率はおおむね良好であり、授業への出席時間と授業の予習・復習の時間の間には相関があり、授業への出席時間が長いほど、授業の予習・復習等の時間も

長くなることが報告されている。その他にも、授業への出席と成績評価の関係を調べた研究は国内外にあり、その間には正の相関、つまり、出席率の高い大学生は成績も良いことが明らかにされている (Ancheta & Daniel, 2021、Guleker & Keci, 2014、牧野 2005)。

1.2 新型コロナウイルスの影響

2019年、新型コロナウイルス感染症が発生し、国内でも猛威を振るった。緊急事態宣言が発令・解除されたが、いまだ感染症は続き、発生状況の報告が定期的に行われている (厚生労働省 2025)。一方、社会や経済は、その影響を不安に感じつつも、コロナウイルスと共存する言葉として、アフターコロナやウィズコロナが掲げられた。時が流れ、最近ではもはや死語になったようにも感じるが、産業ごとの明暗がはっきりと分かれたという報告もある (第一生命経済研究所 2024)。

若者への影響については、大学生はコロナで教育機会が、幼児は認知力の発達が損なわれ、将来の収入が数10%も低くなる恐れがあること (世界銀行 2023) や、若者の半数が行動制限がなくなっても感染は心配であること (日本赤十字社 2023) といった負の影響が指摘される。ベネッセ教育総合研究所 (2022) は、大学生の生活実態調査から、例えば「大学の授業などへの出席 (オンラインを含む)」は、2012年と比べて2021年は大きく減少しているが、既に減少傾向は2016年 (~コロナ禍前) から確認できることや、「大学の授業以外の自主的な学習」は、2012年から2021年まで変化がないと述べる。鴻上ら (2020) は、「新型コロナの感染拡大は、日本および日本人のさまざまな面をあらわにした。それは、新型コロナによって新しく生み出されたものではなく、今までなんとなく水面下にあったり、自覚していなかったり、ほんやりとしか感じなかったことが、はっきりとしたかたちに、それも凶暴で陰湿なかたちになって現れてきたと感じる (3頁)」という。コロナ禍によって、若者をはじめ、大学生は負の影響を受けたと言えるが、それはコロナ禍の以前から兆候があり、コロナ禍によって、より顕著になったと考える (田上 2024)。

以上のような背景の中、大学の教育現場に携わる教員の一人として、大学生への影響、特に授業の出席に関して違和感を抱く。その違和感とは、授業には出席するのに成績評価は低く、不合格となる大学生が増えていることである。これまでは、不合格となる大学生は最初から出席率が低い、もしくは、途中から出席率が悪くなるが多かった。しかし、最近では、授業には基本出席し、最後の授業まで出席するのに、単位を落とす大学生 (不合格者) が増えている。単位を落とす主要因は課題の提出率の低さと考えられる。課題の提出を忘れ、注意を受けたにも関わらず、授業には出席する。授業では受講態度や取り組み姿勢に大きな問題があるようには見えない。これは思い違いか、何かの予兆だろうか。そこで、ここ数年に担当した科目の成績分布を調べてみた。その調査結果を示す。

2. 集計結果の傾向

取り上げた科目は、著者が担当する「リーダーシップ入門」と「ファシリテーション入門」であ

る。いずれも全学部の全学年を対象とする選択科目であり、定員 30 名のグループワークなど演習形式の授業である。期末試験がなく、平常点で成績評価を行う。基本、授業ごとに課題を課すため、課題の提出率は成績への影響が大きい。今回、授業には出席するのに成績が不十分な大学生を対象とするため、授業時間内の課題ではなく、授業時間外の個人課題の提出率（グループ課題を除く）を調査した。また、単純化するため、課題の提出率に着目し、課題の配点に対する取得率（例えば課題の配点が 5 点の場合に取得した点数の割合）は対象外とした。授業計画や評価基準の変更がないと考えられる、2022 年から 2025 年までの 4 クラス分の集計結果を記す。いずれも担当教員は同一である。そのため、判断基準が一定になるが、主観や偏りが生じやすい調査結果であることに留意いただきたい。

(a) 従来型の傾向（課題を提出せず、授業も欠席する不合格者）：出席と成績評価に相関あり

科目 a の 2022 年春学期から 2025 年春学期までの 7 学期分の結果を表 1-1 に示し、不合格者のみの課題未提出率と欠席率の平均を表 1-2 に示す。表 1-1 より、成績評価の分布は 5 段階に概ね分かれており、大きな偏りがないと考える。また、表 1-2 より、不合格者は課題未提出率がいずれも 40% を超えており、欠席も 5 回以上もある。授業への出席と成績評価の関係に相関があり、従来型の傾向があると言える（以下、「従来型」と称す）。なお、課題によって配点は異なるが、期末試験がないため、平常時の課題の評価が成績に大きく寄与する。よって、課題の未提出率が 40% を超えると、成績評価の総得点も 60% を下回りやすくなり、提出物の評価に関わらず、60 点未満の不合格になる可能性が高くなる。

表 1-1 科目 a の成績分布と平均点のクラス平均

年・学期		22 年春	22 年秋	23 年春	23 年秋	24 年春	24 年秋	25 年春
度数 [人]		23	29	30	26	30	22	26
成績 評価 の 分布 [%]	秀	30.4	17.2	23.3	0.0	10.0	4.5	7.7
	優	39.1	55.2	33.3	30.8	26.7	27.3	7.7
	良	17.4	13.8	33.3	38.5	46.7	36.4	50.0
	可	4.3	10.3	6.7	15.4	13.3	22.7	23.1
	不可	8.7	3.4	3.3	15.4	3.3	9.1	11.5
	全体	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
平均点 [点]		80.7	79.6	80.8	67.7	77.4	70.9	69.7
分散		392.1	264.2	152.5	462.5	92.8	291.8	259.6

- ・度数：履修放棄を除いた履修者数
- ・成績評価の分布：評価のレベル別の割合（%）。太字は全体 100% 中の最大値。5 段階評価に大きな偏りはない
- ・平均点：成績評価を 100 点満点で換算した時のクラス平均

表 1-2 科目 a の、不合格者の課題未提出率と欠席数の平均値

年・学期	22 年春	22 年秋	23 年春	23 年秋	24 年春	24 年秋	25 年春
不合格者数[人]	2	1	1	4	1	2	3
課題未提出率[%]	66.7	60.0	60.0	65.0	40.0	50.0	53.3
欠席数[人]	9.0	12.0	5.0	8.8	6.0	9.0	7.3
不合格者の傾向	従来型	従来型	従来型	従来型	従来型	従来型	従来型

- ・課題未提出率と欠席数は、不合格者のみを抽出した平均値を示す。課題未提出率は、授業時間外の個人課題の未提出率を算出したもの（出席率との関係を調べるため、授業時間内の課題を除く）。
- ・課題未提出率はいずれも 40% を超え、欠席は 5 回以上である。課題によって配点は異なるが、期末試験がないため、未提出率が 40% を超えると、総得点も 60% を下回る（不合格となる）可能性が高くなる。出席率が低く、成績も低いことから、従来型の傾向と言える。

(b) 従来型と異なる傾向（課題は提出しないが、授業には出席する不合格者）

従来型と異なる傾向を示す科目 b の 7 学期分の結果を表 2-1 に、不合格者の課題未提出率と欠席率の平均を表 2-2 に示す。表 2-1 より、成績分布に大きな偏りはない。また、表 2-2 より、2022 年春、2022 年秋、2023 年春は従来型の傾向と同じく、不合格者の課題未提出率は 40% を超え、欠席も 5 回以上である。しかし、2023 年秋、2024 年秋、2025 年春については、課題未提出率は 40% を超えているが、欠席数が従来型と比べて少ない。つまり、授業には出席するが、課題の提出率は低い傾向がある（以下、「b 型」と称す）。

表 2-1 科目 b の成績分布と平均点のクラス平均

年・学期		22 年春	22 年秋	23 年春	23 年秋	24 年春	24 年秋	25 年春
度数[人]		21	29	29	30	30	29	28
成績 評価 の 分布 [%]	秀	14.3	20.7	0.0	3.3	3.3	0.0	0.0
	優	38.1	24.1	37.9	23.3	36.7	10.3	7.1
	良	23.8	27.6	48.3	20.0	23.3	37.9	10.7
	可	9.5	10.3	10.3	33.3	36.7	34.5	64.3
	不可	14.3	17.2	3.4	20.0	0.0	17.2	17.9
	全体	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
平均点[点]		75.5	70.4	75.0	68.0	73.9	68.1	62.7
分散		273.9	629.3	134.8	255.2	71.1	74.5	99.9

- ・成績評価の分布：評価のレベル別の割合（%）。太字は全体 100% 中の最大値。5 段階評価に大きな偏りはない

表 2-2 科目 b の、不合格者の課題未提出率と欠席数の平均値

年・学期	22 年春	22 年秋	23 年春	23 年秋	24 年春	24 年秋	25 年春
不合格者数[人]	3	5	1	6	0	5	5
課題未提出率[%]	86.7	57.1	57.1	47.6	0.0	54.3	68.6
欠席数[人]	5.3	8.8	10.0	3.0	0.0	2.4	3.2
不合格者の傾向	従来型	従来型	従来型	b 型	---	b 型	b 型

・22 年春、22 年秋、23 年春は、従来型の傾向（課題未提出率が 40% を超え、欠席も 5 回以上）。@@・23 年秋、24 年秋、25 年春は、課題未提出率は 40% を超えているが、欠席は 3 回程度未満。従来型と同様に課題を提出しないが、授業に出席する割合は高い不合格者と言える。

(c) 従来型と異なる傾向（授業に出席し課題を提出するが、低得点が続く不合格者）

(d) 従来型と異なる傾向（授業は欠席しても課題を提出するが、低得点が続く不合格者）

続いて、科目 c と d の 7 学期分の結果を表 3、表 4 に示す。表 3 より、2022 年春、2023 年春、2023 年秋は従来型の傾向と同じく、不合格者の課題未提出率は 40% を超え、欠席も 5 回以上である。しかし、2022 年秋、2024 年秋、2025 年春については、課題未提出率は 40% 未満であり、欠席も 3 回程度未満である。従来型と比べ、課題を提出し、授業に出席する割合も高いが、不合格者になったと言える。課題を提出しているが、成績評価が低いことから、課題の評価が低い、言い換えれば、低得点のものが多いと考えられる。つまり、授業に出席し課題も提出するが、課題は低得点が続く傾向がある（以下、「c 型」と称す）。2024 年秋については、課題未提出率は 40% 未満だが、欠席は 5 回以上である。つまり、c 型と同じく課題を提出するも低得点が続く一方で、c 型と異なり授業を欠席する割合は高い傾向がある（以下、「d 型」と称す）。また、表 4 より、科目 d は従来型と b 型、c 型、d 型が混在していることがわかる。

表 3 科目 c の、平均点と不合格者の課題未提出率と欠席数の平均値

年学期	22 年春	22 年秋	23 年春	23 年秋	24 年春	24 年秋	25 年春
度数[人]	27	29	27	27	30	26	27
平均点[点]	69.2	63.0	63.1	58.1	58.3	54.3	56.1
分散	385.0	335.5	580.1	617.6	432.3	645.4	452.4
不合格者数	3	8	7	9	13	10	11
課題未提出率	64.3	29.7	48.2	48.6	34.6	36.3	38.6
欠席数	7.0	3.9	6.1	6.0	3.7	5.5	3.1
不合格者の傾向	従来型	c 型	従来型	従来型	c 型	d 型	c 型

・22 年秋、24 年秋、25 年春は、課題未提出率は 40% 未満であり、欠席は 3 回程度未満。従来型と比べ、課題を提出して、授業に出席する割合も高い不合格者と言える（c 型）。

・24 年秋は、課題未提出率は 40% 未満だが、欠席は 5 回以上である。従来型と比べ、課題を提出するが、授業に出席する割合は低い不合格者と言える（d 型）。

表4 科目 d の、平均点と不合格者の課題未提出率と欠席数の平均値

年・学期	22年春	22年秋	23年春	23年秋	24年春	24年秋	25年春
度数[人]	30	30	29	21	27	29	30
平均点[点]	62.1	62.8	66.8	43.2	64.1	53.3	44.9
分散	520.7	477.8	294.7	689.2	345.3	416.0	484.0
不合格者数[人]	8	7	6	13	5	13	18
課題未提出率[%]	37.5	46.4	42.7	46.6	38.8	42.3	41.0
欠席数[人]	5.9	5.1	4.2	5.2	3.6	4.3	4.2
不合格者の傾向	d型	従来型	ややb型	従来型	c型	ややb型	ややb型

- ・22年秋、23年秋は、課題未提出率が40%を超え、欠席も5回以上である（従来型）。@@・23年春、24年秋、25年春は、課題未提出率は40%を超えているが、欠席は4回程度。従来型と同様に課題を提出しないが、授業に出席する割合はやや高い不合格者と言える（ややb型）。
- ・24年春は、課題未提出率は40%未満であり、欠席は3回程度未満である（c型）。
- ・22年春は、課題未提出率は40%未満だが、欠席は5回以上である（d型）。

表5 [参考] 他大学の科目 e の、平均点と不合格者の課題未提出率と欠席数の平均値

年・学期	22年春	22年秋	23年春	23年秋	24年春	24年秋	25年春
度数[人]	24	23	24	24	22	19	23
平均点[点]	78.1	76.1	75.8	67.0	65.6	71.8	67.2
分散	81.3	103.2	178.7	152.6	138.2	133.0	71.6
不合格者数[人]	2	1	2	3	6	1	2
課題未提出率[%]	25.0	16.7	45.8	41.7	16.7	33.3	33.3
欠席数[人]	2.0	2.0	5.0	4.7	2.5	6.0	3.5
不合格者の傾向	c型	c型	従来型	従来型	c型	d型	c型

参考データとして、他大学の科目 e（定員 24 名）の結果を表 5 に示す。科目 a-d と同じく、全学部の全学年を対象とする選択科目であり、期末試験がなく、平常点で成績評価を行う。但し、授業計画と評価基準が一部異なるため、参考値として掲載する。表 3 の科目 c と近い傾向を示すが、表 3 と比べると、c 型の課題未提出率と欠席数の値が小さい。課題を提出し、授業に出席する割合がより高い不合格者となる。つまり、授業に出席し課題を提出するが、提出した課題の多くが低得点で、評価の低い状態が続いたものと考えられる。

表 6 不合格者の分類 (4つの型)

傾向	出席率・提出率	説明
a型	出席×・提出×	授業の欠席が多く、かつ課題の提出率も低い不合格者
b型	出席○・提出×	授業には出席するが、課題の提出率が低い不合格者
c型	出席○・提出○	授業に出席し課題も提出するが、合格点に達しない者
d型	出席×・提出○	授業を欠席しながら課題を提出するが、合格点に達しない者

続いて、不合格者4つの型の特徴を表7にまとめる。注目すべき点は、b型とc型である。b型の不合格者は、欠席数が多くないが、課題提出率は低い。では、なぜ出席は続けるのに課題を提出しないのか。なぜ課題を提出しないのに出席を続けるのか。また、c型の不合格者は、欠席数が多くなく、課題提出率も低くない。課題を提出しているのに不合格になることから、課題の評価が低く、低得点が続いたと考えられる。では、なぜ課題の低得点が続くのに、授業への出席は続けるのか。なぜ出席を続けるのに課題の低得点を改善できないのか。出席しても授業を聞いていないのだろうか。授業に出席する目的が違うのか。単位を取得するために、授業内容を理解しようとししないのか。もしも単位の取得をあきらめたのであれば、なぜ出席を続けるのだろうか。疑問があふれる。

- 単位取得をあきらめた →なぜ出席するのか。なぜ課題を提出するのか。
- 単位取得をあきらめない→出席を続けるのに、なぜ低得点が続く課題を改善しようとししないのか。

表 7 不合格者の4つの型の特徴

不合格者の傾向	授業への出席と成績評価の関係	課題提出率と成績評価の関係
従来型 (a型)	相関あり (欠席数：多)	相関あり (提出率：低)
b型	不明 (欠席数：多くない)	相関あり (提出率：低)
c型	不明 (欠席数：多くない)	不明 (提出率：低くない)
d型 (従来型?)	相関あり (欠席数：多)	不明 (提出率：低くない)

- ・従来型 (a型) の不合格者は、欠席数が多く、課題提出率も低い。よって、成績評価と授業への出席および課題提出率と相関がある。
- ・b型の不合格者は、欠席数が多くないが、課題提出率は低い。よって、成績評価と授業への出席との関係は不明になるが、課題提出率との相関はある。
- ・c型の不合格者は、欠席数が多くなく、課題提出率も低くない。よって、成績評価と授業への出席および課題提出率との関係は不明になる。
- ・d型の不合格者は、欠席数が多いが、課題提出率は低くない。よって、成績評価と授業への出席との関係は相関があるが、課題提出率との関係は不明になる。但し、授業への出席率が低いことから、授業の理解が浅くなりやすいと考えられる。そのため、課題を提出しても、評価は低く、低得点を取得しやすい。よって、授業への出席と成績評価の関係に相関がある従来型と同じ傾向とも類推される。

課題の未提出率は、不合格者のみならず、クラス平均で増加傾向にある。図1に科目 a-e におけ

る課題未提出率のクラス平均を示す。図1をみると、課題の未提出率は、不合格者に限らず全体的に増加傾向に見える。

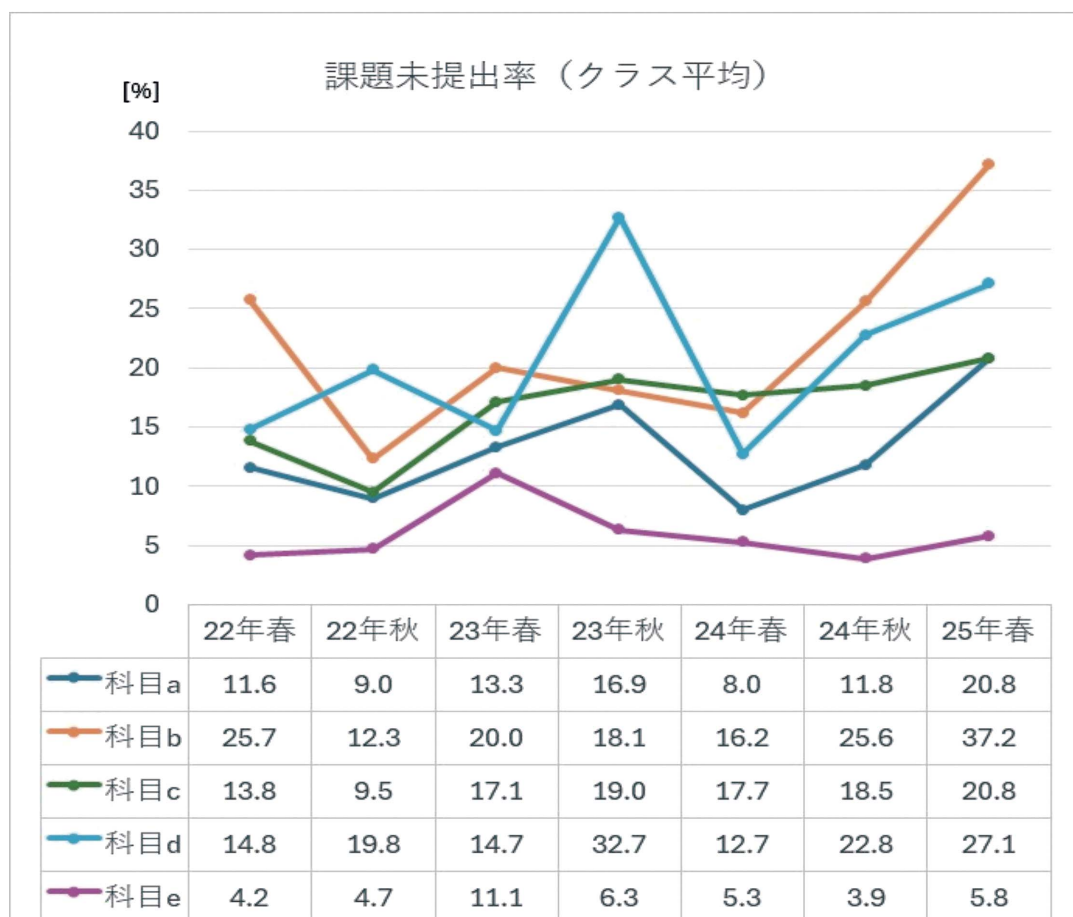


図1 課題未提出率（クラス平均）

3. 考察

○出席時間は長くなる一方で、学習時間が短くなっている（オンライン授業の減少か）

文部科学省は、「全国学生調査」として、全国の大学生を対象とした大規模なアンケート調査を2019年度から試行している。その第3回目の調査が2022年から2023年にかけて実施され、10万人を超える大学生から回答を得た結果を公表している（文部科学省2023）。調査対象は、532大学に在籍する学部2年生（約46万人）及び4年生等（約49万人）と参加意向のあった短期大学148校に在籍する2年生以上（約2.4万人）である。その結果をみると、「授業への出席時間が長い一方で、予習・復習・課題など授業に関する学習については週5時間以下の大学生が約半数を占めている」「前回調査結果と比較しても改善傾向が見られず、引き続き授業への出席時間に比して授業に関する学習時間が短くなっていることが明らかとなった。」とある。つまり、授業への出席時間

は、引き続き長くなる一方で、予習・復習・課題など授業に関する学習時間が短くなっていることを指摘する。また、その要因として、「予習・復習・課題など授業に関する学習時間については、授業への出席時間はほとんど変化していないにもかかわらず、週5時間以下の大学生が第2回試行実施と比較して増加している傾向が見てとれる（大学2年生：41%→49%、短期大学：65%→75%）。これは、前回調査時と比較して今回調査時において、レポート等の課題が多い傾向にあったオンライン授業が減少し、その結果、授業に関する課題に取り組む時間が減少した可能性が考えられる。」と記す。

○アルバイトは授業への出席を妨げないが、予習・復習の時間に影響を与えている

国立教育政策研究所（2016）が実施した「大学生の学習実態に関する調査研究」（研究期間2013年～2015年）では、授業への出席時間と授業の予習・復習の時間の間には相関があると報告されている。つまり、2016年頃の大学生は、授業への出席時間が長いほど、授業の予習・復習等の時間も長くなる傾向があったと言える。さらに、授業の出席に対して、アルバイトが妨げになっているわけではないとし、「授業への出席時間は確保できているけれども、長時間のアルバイトの影響は、予習・復習の時間に現れていると思われる。」と記す。つまり、アルバイトは授業への出席を妨げていないが、予習・復習といった授業に関する学習の妨げになっていることを示唆する。

ここ数年で、アルバイトをしている大学生は増加傾向にある。図2は、マイナビ（2024）による「大学生のアルバイト調査（2024年）」の結果である。図2より、アルバイトをする大学生は71.1%と前年より2.7pt増加し、コロナ禍の影響が出る前の2020年調査の水準（71.8%）にまでほぼ回復している。他にも、全国大学生生活協同組合連合会（2025）による「第60回学生生活実態調査（2024年）」によれば、アルバイトをする大学生は、2024年に76.8%あり、2015年以降の10年間

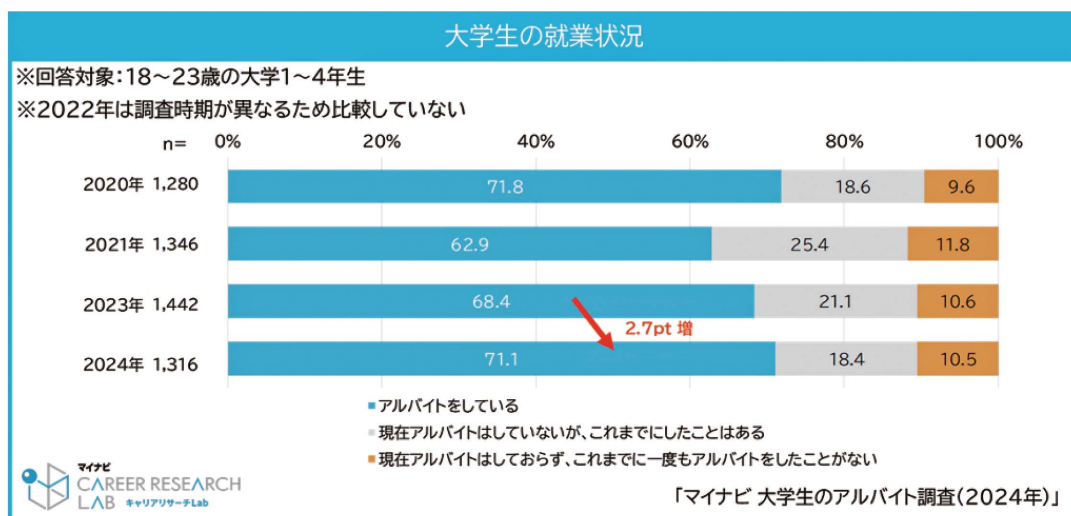


図2 大学生のアルバイト就業状況（引用：マイナビ2024）

で最多になると報告している。Newsweek（2025）は、2025年のアルバイトをする大学生の割合は、2023年と比べて約5ポイント上昇し73.5%としている。

就職に対する不安から「授業はまじめに出席するのが当たり前」となり、授業への出席時間は長くなる一方で、予習・復習・課題など授業に関する学習時間は短くなっている。その要因として、オンライン授業の減少も考えられるが、アルバイトの増加が学習の妨げになっていることを示唆する。さらに、平常点となる課題を提出することは、教師との関係作りや日常の約束事を守る習慣作りとも言える。約束を守らないことは、社会的な信頼の低下にもつながる。信頼の土台が揺らいでいることの表れなのかもしれない。

参考文献

- 片桐新自（2014）「不透明社会の中の若者たち－大学生調査25年から見る過去・現在・未来－」関西大学出版部
- 鴻上尚史・佐藤直樹（2020）「同調圧力 日本社会はなぜ息苦しいのか」講談社現代新書
- 厚生労働省（2025）「新型コロナウイルス感染症に関する報道発表資料（発生状況）2025年」（https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_00474.html）（最終アクセス日：2025年10月14日）
- 国立教育政策研究所（2016）「大学生の学習実態に関する調査研究について（概要）」（https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pf_pdf/20141007.pdf）（最終アクセス日：2026年1月19日）
- 世界銀行（2023）「コロナの影響で若者が「失われた世代」となる恐れ」2023年2月16日記事（<https://www.worldbank.org/ja/news/press-release/2023/02/16/covid-19-s-impact-on-young-people-risks-a-lost-generation>）（最終アクセス日：2025年11月4日）
- 全国大学生生活協同組合連合会（2025）「第60回学生生活実態調査 概要報告」（https://www.univcoop.or.jp/vision/vision_493.html）（最終アクセス日：2025年11月7日）
- 田上正範（2024）「コロナで顕在化した若者像に関する一考察」追手門学院大学共通教育論（2），115-130.
- 第一生命経済研究所（2024）「経済再開後のサービス産業～「アフターコロナ」って何処行ったの？～」2024年7月24日記事（<https://www.dlri.co.jp/report/macro/351328.html>）（最終アクセス日：2025年11月3日）
- 日本赤十字社（2023）「若者の半数「行動制限が少なくなっても感染は心配」と回答、長引くコロナ禍の生活が若者に与える影響を日赤が経年調査」2023年3月13日記事、（https://www.jrc.or.jp/press/2023/0313_031519.html）（最終アクセス日：2025年11月4日）
- ベネッセ教育総合研究所（2022）「第4回大学生の生活実態調査報告書（データ集）[2021年]」（<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail.php?id=5772>）（最終アクセス日：2025年11月4日）
- マイナビ（2024）「大学生のアルバイト調査（2024年）を発表」2024年4月25日記事、（https://www.mynavi.jp/news/2024/04/post_43332.html）最終アクセス日：2025年11月7日）

- 牧野幸志 (2005) 「学生による授業評価と出席率との関係 (1) - 授業に出ていない学生は授業を悪く評価するのか? -」 摂南大学経営情報学部論集 13(1), 1-14.
- Newsweek (2025) 「大学生が「第3の労働力」に. . . 物価高でバイト率、過去最高水準に」 2025年10月16日記事、(<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2025/10/574929.php>) (最終アクセス日: 2025年11月5日)
- RF Ancheta, D Daniel, R Ahmad (2021). Effect of class attendance on academic performance. *European Journal of Education*, 8(9).
- R Guleker, J Keci (2014). The effect of attendance on academic performance. *Mediterranean Journal of Social*. 5(23), 961-966.